
ヒトでなしの外仕事

みっこなっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトでなしの外仕事

【Nコード】

N2348Z

【作者名】

みつこなつこ

【あらすじ】

《ムーンライトノベルの方で連載していたものの番外編（本当はこっちが本編かも）を掲載しています。エロ要素は皆無です。オタク臭たつぷりのありきたりなファンタジー小説です。そういったものが苦手な方はご遠慮ください》

剣と魔法の世界。百年の長きに亘る戦乱の時代がようやく終わりを迎えようとしていた。魔硝石の鉱脈を巡って争っていた国々は終戦の話し合いの場として連合国議会を設け、同じテーブルにつく。しかしある一国だけが、その求めに応じず、戦力を大幅に増強して戦

争を再開した。悪化する戦況を打開するため、シオンとウラルの二人は絶海の孤島を訪れる。

1（前書き）

ムーンライトノベルの方で連載していたものの番外編（本当はこっちが本編かも）を掲載しています。エロ要素は皆無です。オタク臭たっぷりのありきたりなファンタジー小説です。そういったものが苦手な方はご遠慮ください。素人なため、稚拙で見るに堪えない誤字や誤用があるかもしれません。極力ないように気をつけて書いてはいますが、その際はご容赦ください。

「なりふり構わず、つてのは、あんまり好きじゃないな。」

シオンは軍議が始まってから小一時間経ち、ようやく口を開いた。さつきから聞いていれば、この泥沼化した戦況を打開する具体的な策は一つも出てきていない。それどころか、とにかくやるしかない、という精神論的な話ばかりが先立ち、このままでは何の策もないまま、戦争が再開されることは明らかだった。

普段、軍議に出ても、あまり口を開く方ではないシオンだったが、今日ばかりは黙っては居られなかった。

「あなた方、連合国議会に加盟する方々は、お国のため、世界のため、民のため、なんとも理由をつけて、兵の志気を上げるのはなんてことないだろう。しかし我々傭兵には、そんなものはないのですよ。金と名声、それだけです。具体的な策もないまま、我々は兵を出せません。無駄死にもいいところだ。」

まどろっこしい、とシオンは思った。敬語を使うのは苦手だ。角をたてずに、事を運ぶというのはとても難しい。もともと、普段の自分の素行のせいで、角などどつくの昔に立っていることを、自覚してもいた。

「傭兵隊長殿、ならば何か考えてもおありですか？」

連合国議会の議長国の男が、シオンを鋭い眼差しで見た。

「これ以上の兵力の増強も望めないのなら、この戦、負けることは必至です。俺、いや、私は自分の部隊の人間を死なせたくない、それだけだ。そのためなら、兵を引くことも、厭わない、ということです。傭兵部隊なしで、どうぞ、戦争なさってください。これは傭兵部隊の総意です。彼らは命をかけてまで戦争をする後ろだてがないのですよ。あなた方と違ってね。」

そう言つと、シオンは席を立った。無言で会議室を出てゆく。

「まだ、軍議は終わっていませんよ。」

後を追って、東の小国の女隊長が出てきて慌ててシオンを引きとめた。

シオンはゆっくりと振り返り、しっかりと愛想笑いを作り、彼女に言った。

「俺は俺なりに、策を講じてみます。さっきはああ言いましたが、俺個人としては、この戦、負けるわけにはいかない事情ができてしまったので。」

そう言って、彼女に小さくお辞儀すると、シオンは背を向けて足早に歩き始めた。

数歩行ったところで、指に嵌めた指輪を徐に口に寄せる。

嵌め込まれた紅い魔硝石に、小さく「来い」と命令すると、シオンの横に光が集まり、たちまち一人の男の姿が形作られた。

透けるような白い肌、長い銀色の髪、深紫色の瞳。一見女性と見間違ふほど、美しい容貌の男だった。しかし、彼は人間ではない。精気のない表情が、それを物語っていた。

彼は魔硝石で作られた人形「ワンドール」だ。主人の命令に忠実に従い、魔術を発動させるだけの、ただの道具でしかない。

「軍議が終わったのですか。」

ワンドールが、ぴつたりと閉じられていた口を開いて、シオンに尋ねる。

「まだやってるよ。俺は職務放棄。」

そう言いながら、シオンは苦しげに軍服の襟元を緩めた。

「戦が始まるまでの間、行くところができた。ついてこい、ウラル。」

「はい。」

シオンの使役するワンドール、ウラルは柔順だ。やれと言ったことを確実にこなし、そしていつでもシオンの元に帰ってくる。情に流されたり、無駄な動きを全くしない、非常に優れた道具だった。

彼らができたのは、この戦が始まる少し前の頃のことだ。

魔硝石の鉱脈が発見され、その利用方法が確立されていく過程で、彼らは生まれた。

ただの魔術を発動させる石だった魔硝石に、特殊な術をかけ、自ら考え、動くようにしたのが、ワンドールだ。

中でも、優秀な魔術師だったエル レミオス アラメインという男が作ったワンドールは、製造から百年経った今も、最強のワンドールと言われている。

使役する術者「導師」の意思を読み取り、簡単な条件命令さえあれば、自立して活動することのできる人形なのだ。

一般的なワンドールは、導師の声の届く範囲内でしか活動できず、声に反応して魔術を発動させる。しかしアラメインの作ったワンドールは、任務遂行のために必要と判断すると、主人の声なしに、魔術を発動させることができる。人々は、自立して行動のできる彼らのことを「エルシリーズ」と呼んでいる。

その製造方法は、アラメインとその弟子たちにしか伝えられておらず、アラメイン本人はもちろん、その弟子たちも、すでに全員死亡している。

残ったのは、彼らの手によって作られた、ワンドール「エルシリーズ」のみ。

シオンが使役しているウラルも、エルシリーズの一人で、製造した導師はすでにいない。シオンの手に渡ったのは、つい十年ほど前のことだ。

エルシリーズを使役する導師は、どういうわけか皆早死にだ。ウラルも、製造から約百年近く経っているが、何人もの主人の手を経て、今に至る。彼らが呪いの人形と言われる理由だ。

また、彼らの特徴として、人間の感情表現を模倣して、表情を作ることができる、ということがあげられる。あくまで、学習の副産物としての疑似的なものだが、仕える主人によっては、人間以上に表現力豊かにもなるという。

「どこへ行かれるのですか？」

無表情のまま、ウラルは歩き出したシオンの後を追従する。

「俺の、親父の、ふるさと。」

シオンはそう言いながら、分厚い生地で作られた軍服を脱いでウラルに放り投げる。

服をすっかりキャッチし、腕にかけ、ウラルは少し眉をひそめた。

「竜神族の、島にですか？」

「そうだ。」

「私も、一緒にですか？ 可能、なのでしょう。あそこは、一族の者しか入ることができない島なのでは？ あなたは、いいでしょうが、私は……。」

「おそらく、大丈夫だろう。……なんてったって、お前の中に流れる魔硝液の溶媒になってるのは、俺の血だからな。それに、あそこに入って、生きて出られる確率は五分と五分。俺の死に際に立ち合いたいお前には、見過ごせないだろう。」

シオンは鬱陶しいほどに目にかかる前髪を掻きあげ、ニヤリと意味ありげに笑い、ウラルを見やる。

その瞳の色は左右違っていた。

右目は、一般的な碧い瞳だが、左目はワンドール達と同様の紫色だった。しかし、若干藍色の混ざった、不思議な輝きを持っている。その瞳の色に魅せられたように、ウラルは立ち止まり、じっとシオンを見つめた。

シオンも足を止め、ウラルを見返す。

ウラルは、シオンが死ぬのを待っているのだ。

それは、ある目的のため。

シオンの左目はとあるワンドールから移植された義眼だ。

そのワンドールとは、エルシリーズ最初の一体で、最強の人形。名前を「アイリス」という。

シオンが死んだ時、その左目を返還してもらったため、アイリスは彼の元を訪れるという。

それを、ウラルは待っているのだ。

「いいでしょう。私も行きます。」

ウラルは頷き、にっこりと笑みを作った。花の咲いたような、完璧な笑顔だ。しかし、どこか、背筋がゾクリとする冷たさを持っている。

その冷たさを感じるのは、おそらくシオンだけだ。

ウラルはシオンの最期を待っている。

「呪いの人形か、あるいは死神か。」

シオンは小さくつぶやき、毒づいた。

そしてウラルと共に、歩き出す。

「竜神族の島」に向かって。

2（前書き）

この世界についての説明と、戦争の経緯について書いてあります。説明的な部分が多くて申し訳ありません。ささーっと読んでいただけたら、と思います。

魔硝石というものが発見されて、およそ百二十年。

それは洞窟の奥深くや、密林の奥等、人目に付きにくい場所に、地面から生えるようにして存在している。薄い紫色の水晶のような形状で、その色が濃ければ濃いほど、純度が高く、その分、内包するエネルギー量も大きい。特徴は、金属では傷一つつけることができないということ。高圧の水の刃でなければ、切り出すことができないのだ。

その魔硝石の使い手である魔術師たちは、こぞって研究を重ね、その利用方法を編み出していった。

魔術師たちの手により、魔硝石は夢を叶える石となり、たとえば干ばつの田畑に雨を、明りのない洞窟に光を、火のないところに煙を立てることなど、造作もないことだった。

やがて、魔硝石の利用は国家的事業となり、各国は優秀な魔術師と、大きくて高純度の石の取れる鉱脈の獲得にやっきになっていた。どういうわけか、鉱脈は国境付近に点在しており、やがてそれを巡って国々は争うことを避けられなくなっていく。

そうして、大陸の西側の諸国で始まった小さな戦争を火種に、やがて大陸全土で、魔硝石鉱脈を巡る長きに亘る戦争が始まったのである。

停戦と開戦、休戦を繰り返しながら、およそ百年近く、その争いは続いていた。特に後半は魔硝石を使った兵器が多く投入され「魔導大戦」などとも呼ばれていた。

しかし突如、その争いは終結へと向かう。

東の外れにある国では、一番最初に魔硝石鉱脈が発見されていた。その国で、鉱脈の変異があったのだ。

最古の鉱脈で、魔硝石を採掘し尽くしかけていた、その時。突然、神の怒りにでも触れたかのように、鉱脈が爆発し、崩落した。

そしてその現場を中心に、徐々に不毛の大地へと変わっていったのである。

空からは雪のような白い結晶が舞い降り、地面に降り積もった。

雪と違うのは、決して解けないということ。そして冷たくないということ。

その粉は生きとし生ける者の精気を奪い、死に至らしめて行った。動物も植物も、皆息絶え、ただの白い大地と化し誰も立ち入ることのできない場所となった。

その大地を、人々は「白土」と呼び、決して近寄ることがなくなっ

った。白土化は、目にはわからないスピードで、しかし確実に、年月と共に拡大している。

そこにあつた東の国は、すでに全土が飲み込まれ、住んでいた者たちは皆、散り散りになって大陸の各地に移り住んだ。

鉱脈を巡って争いを続けていた国々は、その知らせを受けて、一時休戦を余儀なくされた。

湯水のように切り出しては利用していた鉱脈をあわただしく閉鎖し、保存に向けた動きをせざるをえなくなる。

やがて、争わずに話し合う場として、連合国議会が設けられた。

鉱脈の利用に関しては、議会によって管理されることとなり、明け渡しの求めに応じない国には、加盟している国々から集結した軍によって、強制的に接収されることとなった。

こうして、長かった戦の時代も終わりを迎えようとしているかに見えたのだが、ただ一国、争いを止めない国があつた。

史上最大の鉱脈を持つ砂漠の国、ベイリーフ国は、その所有権を

激しく主張し、一度消えかけたかに見えた火種をもう一度燃やし始めたのである。

豊富な資源を持つベイリーフは、ワンドールの大量生産に成功した。不死の兵力を手に入れたのである。

ワンドールを大量に生産しても、それを使役する導師がいなくては何の意味も威力もないのだが、ベイリーフにはそれを戦力と変える、強力な魔術師の存在があった。

正体不明のその魔術師を、皆恐れ、「終末の傀儡師」と呼んだ。

この戦の鍵となるのは、その不死の兵力たるワンドールと、それを操る導師をいかに早い段階で見つけ出し、倒すかということ。

ワンドールの前には、もはや、鉄の刀などただの棒にすぎない。

対ワンドール用の、水鉄砲も、なくはないが、そのための大量の水を確保するには、今度の戦場はあまりに不向きだ。すべての兵が魔硝石を使えば、術によって水を生み出すこともできようが、魔術師の数は限られている。

持てるすべての人材と兵器を持っても、あのワンドールの軍団に立ち向かうには、心もとない。

すでに切り出された魔硝石をすべてかき集め、利用するには、いかにせん魔術師の数が足りない。

その不足分を補って余りある人材の存在に、シオンは心当たりがあった。

異界から放逐された一族「竜神族」の住む、その存在すらあまり知られていない、絶海の孤島。

船では辿りつくことのできないその場所にいる彼らに、協力を求めようというのだ。

シオンと、その父しか知らない、秘密の抜け道。

そこを通ることができるのは、竜神族の一族のみ。

いつも、遠くに行くときに利用している枯れ井戸の前に、シオンは立った。

腰に下げた袋から、魔硝石の粉を一掴みした。念じるように握った拳を額に当て、目を閉じる。しばらくそうした後、それを井戸の中にばら撒いた。

すると、枯れていたはずの井戸の中に、ゆらゆらと水面のようなものが見え始める。

後ろに控えていたウラルに目配せをし、先にシオンがその中へと身を投じた。

すぐに、ウラルも後を追う。

二人が井戸の中に消えると、同時に水面も姿を消し、また元の枯れ井戸に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348z/>

ヒトでなしの外仕事

2011年12月8日19時26分発行